

教員を30年以上もやっていると、教え子の皆さんから実に多くのことを学ぶことができる。

初任校である玉川第一小学校で担任した子どもたちは、エネルギーに満ちあふれており、楽しかった反面、中学校に進み、ベクトルを間違えると大変だろうなという思いをもっていた。結果は、案の定、中学校でいろいろとあったようである。

そのエネルギッシュな教え子たちの中でも、特にやんちゃなリーダー格の子が高校生になり、突然電話をくれたことがある。だいたい教え子から突然電話がくるのは、結婚するか、わるい知らせのどちらかと相場は決まっている。高校生なので結婚はないとすると、わるい知らせの方となる。

声のトーンから、ちょっと話ただけで、「何かあったな」とすぐに察しがついた。どうやら問題を起こしてしまったようであった。まわりには、やはりやんちゃだった子どもたちが集まっていた。皆、懐かしい面々である。

私は、どんな問題を起こしたかなどは一切聞かずに、その子の話を聞いてあげるだけだった。説教じみたことも一切言わなかった。高校生になり問題を起こし、なぜ小学校時代の担任に連絡をよこすのであろうか。

初任校での担任時代は、私にはかけがえのない時間である。きっと担任した子どもたちにとってもそうであったのではないかと思う。電話をよこした子とまわりにいる子どもたちは、私に一番怒られていた子どもたちである。だが、子どもたちと私の間には、長い時間を一瞬にして埋めてしまう何かがあったように思う。

H中学校の教え子に、ハンドボールで活躍し、私立高校に進学した生徒がいた。その生徒が高校1年生の夏頃に、その生徒のお母さんからお手紙をいただいたことがある。ハンドボール部で先輩との人間関係がうまくいかず悩んでいるとのことであった。自分の部屋で、製本された学級通信『薫風』をじっと見ていることもあると文面にはあった。お母さんは、「高澤先生に電話してみたら」と言ってくれたそうであるが、その生徒からの電話はなかった。私は、お母さんに電話をし、その子への伝言を頼むことにした。その子にとって、学級通信『薫風』の中には何かあったのであろうか。

私がお世話になっていた頃のH中学校は、決して落ち着いている学校ではなかった。私の学級には、特に活動的な生徒が2名いた。簡単に言うと、私とその2名の指導担当になったわけである。一人は野球部で勉強ができる生徒、もう一人は同じ野球部で勉強が苦手な生徒だった。

勉強ができるほうの生徒は、野球部でも中心選手の一人で、野球の方でいくつかの高校から誘いがあるほどだった。しかし、本人が出した結論は「福島高校に入り野球を続ける」というものだった。その頃の彼の学力では、合格可能性は低い状態だった。

ここからが彼のすごいところで、1月、2月、そして3月の入試の日まで、毎日4時間睡眠で勉強し、頑張り通したのである。その結果、福島高校に合格してしまった。ぎりぎり合格ラインに届いたといった状況だったと思う。見事栄冠を勝ち取った彼は福島高校野球部に入ることになる。ところが、足をけががしてしまい、野球の道は断念することとなった。

一方、勉強が苦手な生徒は、どうしても高校に行きたいというので、毎日私が宿題を出し、何とか合格できる学力をつけられるよう努力させることにした。その結果、どうにか高校生になることができた。

私は、H中学校時代も、F中学校時代も、本人と保護者が「〇〇高校に入りたい」と言えば、そうなるように努力させ、励ますだけだった。「それはやめたほうがいい」「それは無理だ」というようなことは言わないようにしていた。

(次号に続く)